

第 27 回「整形・災害外科 優秀論文賞」のお知らせ

本誌編集委員会では、昨年一年間の本誌に掲載された投稿論文（論究・臨床・手術・経験・症例欄等掲載論文）を対象に優秀論文の選考を行ってまいりましたが、この度、下記の論文が小誌における 2022 年（整形・災害外科 第 65 巻）の優秀論文に決定いたしました。

維持透析患者における脊椎硬膜外膿瘍の特徴

前田琢磨ほか（兵庫県立はりま姫路総合医療センター，整形外科）

〔整・災外 65：829—835，2022〕（6 号）

MRI を用いた腰仙椎椎体前方血管の走行解析

—安全な椎弓根スクリュー固定のために—

若杉正嗣ほか（新潟県立新発田病院，整形外科）

〔整・災外 65：1185—1189，2022〕（9 号）

高位脛骨骨切り術と脛骨顆外反骨切り術の臨床成績比較

樋口隆志ほか（大阪人間科学大学保健医療学部，理学療学科）

〔整・災外 65：1695—1699，2022〕（13 号）

選 者 評

本誌第 65 巻（2022 年）に掲載された投稿論文から、本誌編集主幹 5 名の投票により、優秀論文として上記の 3 編が選ばれました。

前田琢磨氏は脊椎硬膜外膿瘍の特徴を維持透析患者と非透析患者で比較検討され、透析群では発症から診断までの期間が短く神経麻痺症状が多いため手術に至る頻度が高いなどの特徴がありましたが、手術予備能の低い透析患者においても迅速な診断と適切な手術選択により、非透析患者と同等の短期治療成績が得られることを報告されました。

若杉正嗣氏は 431 例の全脊柱 MRI を用い腰仙椎の椎体前方血管の走行を解析され、L5 椎体レベルで静脈が椎体に近接しており、動脈および静脈間の血管間距離も L5 で短いことなどが明らかとなりました。安全かつ効果的に腰仙椎後方固定術を行う上で不可欠な情報です。

樋口隆志氏は同一施設における高位脛骨骨切り術と脛骨顆外反骨切り術の臨床成績を比較し、高位脛骨骨切り術の良好な成績を報告されました。一方、高位脛骨骨切り術群よりも高齢、関節変性の重症度、関節不安定性が高かった脛骨顆外反骨切り術群においても、術後有意な症状改善を示しました。両術式のコンセプトやメリット・デメリットを十分に理解し、重症度や関節安定性など個々の病態に応じて適宜術式を選択することの重要性が明らかになりました。

いずれの論文も素晴らしい内容であり優秀論文にふさわしいものと高い評価を受けました。皆様おめでとうございます。

受賞のことば

この度は「第27回 整形・災害外科 優秀論文賞」に選出していただき、大変光栄に存じます。今回の論文を作成するきっかけとして、私が当時、大変未熟ながら硬膜外膿瘍の症例を初めて経験し、その激しい症状と進行の速さに驚かされたのを鮮明に記憶しております。なかでも維持透析患者における硬膜外膿瘍は病状の進行が早く麻痺症状が残りやすいといった特徴に目をつけ、当院での過去の症例と文献をもとに研究してまいりました。症例数が少ない分、集積したデータから臨床的な意義を見出すことに苦難しましたが、同様の症例で悩まれた先生や患者様の治療の助けになれば大変嬉しく思います。今後も、整形外科学分野において少しでも貢献できるような研究を続けて参りたいと存じます。最後に、本研究を行う上で論文作成のご指導いただきました村津裕嗣先生、宮 秀俊先生にこの場をお借りして心より深謝いたします。

前田琢磨（兵庫県立はりま姫路総合医療センター、整形外科
[現：神戸大学大学院医学研究科・医学部、整形外科学]）



これまでも研究発表の場としていくつかの論文を掲載していただいている中で、思いがけない「第27回 整形・災害外科 優秀論文賞」に選出していただき、たいへん光栄に存じます。脊椎手術において、強固な固定を行う必要性からS1椎体は可能な範囲でbicorticalによるスクリュー固定を目指していますが、腰椎椎体へのスクリューは対側を貫かないように注意してきました。O-armナビゲーションを使用しリアルタイムで血管位置を確認しながらであっても、L5椎体を含めた腰椎椎体は血管損傷のリスクを考慮したスクリュー固定を行っていました。今回検査時と術中で体位が異なる環境下ですが、実際に動静脈の血管走行を分析することでbicorticalでのスクリュー刺入の危険性を再確認できたと考えます。これからの整形外科治療を行ううえで疑問に感じたことを調査研究し、貴誌で発表の機会をいただければと思っております。

若杉正嗣（新潟県立新発田病院、整形外科 [現：あがの市民病院、整形外科]）



この度は、栄誉ある「第27回 整形・災害外科 優秀論文賞」に選出していただき、驚きとともに大変光栄に存じます。長崎大学整形外科では、骨切り術が必要な内側型変形性膝関節症に対し、病態によって高位脛骨骨切り術（high tibial osteotomy；HTO）と脛骨顆外反骨切り術（tibial condylar valgus osteotomy；TCVO）を適応しています。しかし、両者を比較することでTCVOの適応基準やコンセプトを浮き彫りにする臨床研究はなされていませんでした。本論文は、この課題に些かの知見を提示するものであり、臨床の場で少しでもご参考にしていただければ幸甚です。今回の受賞を糧に、今後もますます研究に邁進していく所存です。末筆になりますが、本研究をご指導いただいた長崎大学保健学科の小関弘展教授をはじめ、本誌編集委員会委員の先生方、長崎大学整形外科教室の先生方に心より感謝と御礼を申し上げます。

樋口隆志（大阪人間科学大学保健医療学部、理学療法学科）



優秀論文の筆頭執筆者には、賞状ならびに副賞として金一封・記念品を贈呈いたします。

本誌編集委員会では今後も継続的に各年毎の掲載投稿論文を対象に「整形・災害外科 優秀論文賞」の選考を行ってまいります。読者皆様の活発な研究発表の場として、小誌を存分にご活用ください。

（整形・災害外科 編集室）